

週日の説教

金 大烈 神父 2010年1月13日(水)

《弟子の心構えと宣教の使命》

おはようございます

今日の福音(マルコ1・29-39)の内容を簡単に要約しますと、イエス様がシモン・ペトロの姑の病を癒し、又大勢の人々を癒されて、悪霊を追い出し、宣教のために出掛けていく物語です。今日はイエス様の立場からではなく、側にいた弟子達の立場でこの出来事を考えてみたいと思います。

弟子達は、自分でははっきりと分からなくても、呼び掛けられて「この方に付いて行こう」と決断し、イエス様の弟子になって一緒に活動して来た訳です。自分の予想が外れずに、病人の人々が癒されて涙ながらに喜び合う姿、又イエス様が行う色々なすばらしい出来事を目にして、彼らはどういう気持ちになったのでしょうか。先ず、「この方は本当にすばらしい、自分の選びは正しかった。」と思うでしょう。そして、今日のように沢山の人々を癒す姿を見たら、自分でも気づかないうちに、まるでその癒しを自分が行ったように誇らしい気持ちになると思います。周りの人々も、癒された人々も、イエス様のすばらしさを賞賛し、「ああ、あの人もあの先生の弟子だ!」と言い、もてなしもしたことでしょう。弟子達は、益々自分がその先生になったような心地良い気持ちになったでしょう。本来なら、こういう気持ちは避けたいのが私達の心の働きですが、この弟子達も、この様な気持ちに囲まれたのじゃないかと思います。

そんな時に、イエス様の姿が見えなくなってしまいました。周りの人々が弟子たちに「あなたの先生はどちらにいらっしたのでしょうか。もう大変ですよ、皆、癒して貰いたくて待っているのです。」と話しかけたと思います。そうしたら弟子たちが今日の福音にあるように『イエスの後を追ひ、見つけると、皆が捜しています。』と言ったのでしょうか。優しい言い方ではなく皆が捜している事を強い口調で言ったと思います。それに対してのイエス様の反応は「この村だけではなく、色々な村を回りながら宣教しなければならない。それが私の使命である。」とおっしゃいます。その話を聞いて弟子達の気持ちはどうだったでしょう。がっかりしたでしょうね。せっかくここで大勢の人々に囲まれながら、褒められて、自らも誇らしい気分になっていた弟子達は、「他の所に行こう」という先生の話に本当しがっかりしたと思います。イエス様は、弟子達のこの様な心を推し量って、歩むべき道を教えようとする心を現したのではないのでしょうか。「このままここに留まったら道から外れる恐れがある。私達が歩むべき道はどういう道か、はっきり示さなければならない。」というお気持ちだったのでしょうか。イエス様は優しく説得したと思います。「私達はここに留まるべきではない、他の町や村に行かなければならない」と。

福音書にはイエス様がおっしゃった有名な話があります。『狐には穴があり、空の鳥にはねぐらがある。しかし人の子には枕する所もない』(ルカ9・58-59)この様な心を、弟子達に伝えようとする気持ちが、強かったのじゃないかと黙想してみました。弟子達は、イエス様の宣教の方法を納得出来なかったかも知れませんが、休みながら、もてなしを受けながら、愛を分かち合いながら、善い交わりが出来たのに、何故わざわざ苦勞を捜して動くのか、弟子達の立場では理解出来なかったと思います。

しかしイエス様は今の時だけではなく、未来を見据えなければならない。愛する弟子達も、いつかこの先十字架を負わなければならない事、殉教しなければならない事を強く感じられたと思います。

今日の第一朗読（サムエル上 3・1 - 10 19 - 20）では神様がサムエルに呼び掛ける物語でした。私達全ての信者には、サムエルが何回も呼び掛けられて最後に答えたような『どうぞお話をください。僕は聞いております。』という祈りの姿勢が必要だと思います。この様な態度で、「イエス様の御旨が分からない、私にこんな事が何故？」と思う時、私達に許されているのはこの様な祈りしかない事を意識しましょう。

さあ、皆さん一緒に言ってみましょう「どうぞお話をください。僕は聞いております。」

ありがとうございました。